

新著紹介

○數理地理學

北田宏藏著 古今書院發行 昭和四年五月十四日 定價三圓二十錢

菊版三七六頁 問題の答四頁、索引十二頁、本書篇を分つこと六、緒篇には坐標、球面三角法をのべ、第二篇には觀察地中心系統と題して天球、地平、經緯度、時、曆をしるし、第三篇地球中心系統と題して地球の形、大さ、經緯度の決定時刻、日付、測量、更正緯度をのべ第四篇太陽中心系統として自轉公轉、軌道、月の運行年及月をのべ、第五篇銀河系統として恒星、太陽、銀河系の構造、第六篇に非ユークリッド空間的考察がのべてある。日本文でこれ位數理地理の問題を簡単に解説した本はまだ嘗て見なかつたものである。しかし簡單であるだけに、初學の人には理會されないうであらうと思はるゝ記事が少からず存する、例令はヘルシヤ曆、インド曆さては日本支那曆、いづれも説明は不十分である。球半徑決定の章に於ても支那唐代南宮詒の觀測は、アラビヤの觀測よりも早い丈けに記錄される價值があり、我國でも伊能忠敬の觀測位は記述されてよからうと考へるがどうであらうか。遊星の運動のみかけの説明に關しても、外惑星と内惑星とでちがう。その一方の圖解のみで説明した丈けでは、古人が之を

遊星と呼んだ理由が、明にならぬと思はれる。まづかうした一二は説明が十分でないといふ愚考をのべた所以である。天文地理の問題は手取り早く理解しにくいものであるから、本書の記述の如き簡潔第一主義の行き方では實際初學の人にはわかる所はわかるが、少しく微細の點になると陳紛漢であると思ふ。著者は勿論さうした人を相手に編纂しられたのではなからうとは考へるけれども、現に高等學校程度の文科の學生などにこれを讀まして見て興味を持ち得ないと思ふ。予は本書の如き眞面目な科學的の著書を歡迎すると同時に、かうした智識は、どうしても、もつと碎いて大衆的に呼びかけるやうにしていたゞきたい、この點は健筆の譽高き著者に對する至囑である。妄評多罪。(藤田)

新著即報

○臺灣時報 第一二號 三月

臺灣の海運(深川繁治)

東洋に於ける石炭の需給關係と臺灣炭田の價值(城崎彦五郎)

○史蹟名勝天然紀念物 第四集第四號 四月

天城裾野白雲郷高原を巡る奇勝に就て(湯河俊次)

△改訂最新滿蒙地圖 南滿洲鐵道株式會社庶務部調查課編

昭和三年十二月 大連中日文化協會發賣 折本一圓

軸製三圓